

ICTを活用した中学生のための 聴解力養成教材の開発と試用結果

東京都／品川区立荏原第六中学校 教諭 岡崎 伸一

概要

本研究は、「三ラウンド・システム」(竹蓋・水光, 2005)に基づいた中学2年生レベルの学習者を対象にした教材でICT(e-Learning)を活用した英語聴解力養成用の教材開発と試用効果の検証である。

聴解力養成の中核システムである「三ラウンド・システム」に基づいたWeb教材作成支援システム(竹蓋, 2009)を活用し教材作成をした後に試用した(実際に作成した教材例は3章を参照)。その教材の評価で学習者に対して、1)学習内容の定着を確認するためのChapter Quiz, 2)聴解力の変化を観察するためのPre/Post-test, 3)アンケートによる主観的評価で行った。それらの結果をまとめ、考察をした。

結果として、学習者は1)教材の内容を理解して学習を進め、2)聴解力の伸びが観察され、3)多くの学習者が成就感・達成感を感じ、学習ができたことがわかった。しかし、自由記述では20%が否定的な回答をしていた。学習効果は見られたが解決すべき課題も発見された。

1 はじめに

1.1 背景

近年、政治経済をはじめさまざまな分野においてグローバル化が急速に進んでいる。それらの分野で、「英語が国際共通語として最も中心的な役割を果たしている言語の一つであるという現状」(文部科学省, 2011)を否定することはできないであろう。そして、そのグローバル化で求められる英語力を身

につけるために、文部科学省は「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」を2011年6月に発表した。その提言の3には、「ALT, ICT等の効果的な活用を通じて生徒が英語を使う機会を増やす」とある。ICTに関連した傾向としては、ここ10年ほどの間に、プロジェクターや電子黒板といったICT機器を使った授業を目にするようになった。さらに、最近では少数ではあるがタブレットを活用している学校も見られるようになった。しかしながら、そのような機器がそろっている学校は多くない。一方、たとえそのような最新機器がそろっていない学校でも、1クラスの人数分のパソコンが使用でき、インターネットの接続もできる状態にある学校は多い。そこで、そのパソコンを使い、生徒個人が自分のペースで学習できる環境を提供したいと考えた。さらに、生徒への調査の結果、ほぼ100%の家庭でインターネットを使える環境があり、自宅においてもインターネットを介して学習ができることがわかった。

言語を身につける上で重要な基礎となるリスニング学習の必要性は高いと多くの研究者が考えている。さらに、大学入試センター試験へのリスニング・テストの導入が2006年度から実施され、以前よりもリスニング力が評価されるようになった。しかし、「リスニング・テストなどの市販教材は数多くありますが、中学生、高校生を対象としたリスニング指導の研究や参考とすべき先行実践が少ない」(高橋, 2003, p.104), または「テストあれども指導なし」(高橋, 2003, p.104)との指摘がある。

そのような中、「三ラウンド・システム」(竹蓋・水光, 2005)に基づいたCALL教材で高い効果を挙

げたという中條・楠・西垣(2005)による報告(竹蓋・水光, 2005)がある。この中には中学校における報告も一部あり、中学生の英語聴解力の養成に高い指導効果があったとされている。この報告で使用された教材は高校生上級用または大学生初級用の素材で作られたもので、一般的な中学生にそのまま使用するにはレベルが高すぎるものであった。そこで、この指導理論を活用して中学生用の教材を作成することで、より学習者のレベルに適した教材で中学生の聴解力を上げられる可能性があるのではないかと考え、前述のCALL教材の作成の基礎となった「三ラウンド・システム」に基づいて中学3年生のための教材を独自開発した(牛江・阿佐・与那覇・岡崎, 2010)。この中学3年生用への接続として、今回中学2年生用を作成した。この教材を学校のみではなく、自宅でもリスニング学習を可能にすることで学習時間を確保し、効率よく聴解力を養成できることをめざした。

1.2 研究の目的

本研究の目的は、「三ラウンド・システム」に基づいた中学2年生レベルの学習者を対象にした教材でICT(e-Learning)を活用した英語聴解力養成用の教材を開発し、その教材による学習効果を測定することである。なお、本研究では英語力の中学2年生レベルとは、英検4級程度までを意味する。

1.3 「三ラウンド・システム」CALL教材の特徴

この「三ラウンド・システム」は、英語教育の総合システムの構想を表す名称(竹蓋・水光, 2005)ではあるが、狭義では聴解力養成のための中核シ

テムのことであり、本研究ではこのことを指す。

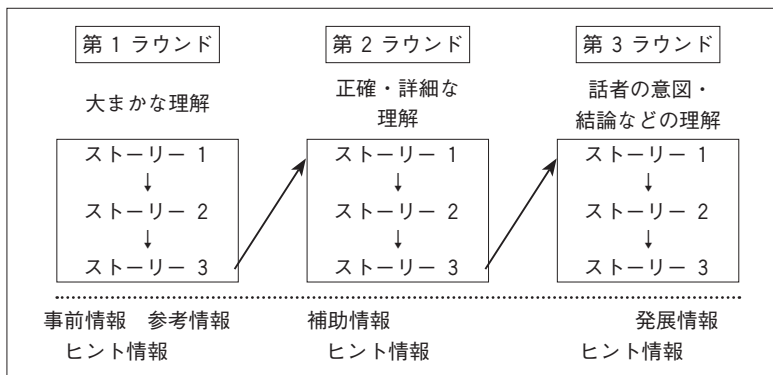
このシステムには以下のような特徴がある。まず、英文を一気に理解させるのではなく、図1のように3回に分けて学習させる。第1ラウンドでは大まかな理解をさせ、第2ラウンドでは正確・詳細な理解をさせる。そして、第3ラウンドで話者の意図や結論などの理解をさせる。中学生用の素材では内容が比較的易しいため、第3ラウンドでは複数の情報を総合して理解させることがある。それぞれのラウンドでタスクが課されるが、第1ラウンドのタスクをまじめに行くと第2ラウンドのタスクが容易になり、第2ラウンドのタスクをまじめに行くと第3ラウンドのタスクが容易になる。つまり、各タスク間を有機的につながるように設定する。そして、図1にあるように、ストーリー1→ストーリー2→ストーリー3のように異なる教材を挟み、断続的に学習する分散学習の手法を取り入れている。そのことで、より学習の定着を図っている。

図1中に記されている、事前情報、参考情報、ヒント情報、補助情報、そして発展情報については、コースウェアの詳細で後述する。

2 教材開発

2.1 本教材の特徴

本研究で開発した教材の特徴は、大きく分けて2点ある。1つ目は、中学生が理解しやすい語彙や文法が使われている素材を使用したことであり、2つ目は聴解力養成の中核システムである「三ラウンド・システム」に基づいたWeb教材作成支援システムを活用した、という点である。



▶ 図1：三ラウンド・システムの構造(竹蓋, 2005, p.70)

まず、教材の素材としては中学校2年生用の市販のリスニング教材（浜島書店編集部, 2007）の研究使用の許可を得た。これは中学生用であるため、語彙や文法面のみではなく、内容に関してもなじみがあるものが多いと考えた。しかし、音声素材に関してはナレーションなどの訓練を受けた英語母語話者のナレーターによって、自然な速度で録音をし直した。それは、音の脱落、挿入、同化などが普通に起こる英語音声聞き、自然な英語を処理する能力を身につけさせたいからである。

次に、学習に必要なタスクとそのタスク遂行に必要な各種情報、さらにその提示するタイミングなどを詳細に記したコースウェアを「三ラウンド・システム」の聴解力養成の中核システムの考え方に基づいて作成した。コースウェアをe-Learning教材とするためのプラットフォームは、教材開発の容易性、指導者が教材編集、学習者管理が容易にできる、か

つ多くの学習者がインターネットを介して自宅で学習できるという実用性を考慮して、「三ラウンド・システム」に基づくWeb教材の作成支援システム（竹蓋, 2009）を開発者の許可を得て使用した。この教材作成支援システムでは、プログラミングの知識がなくともe-Learning教材を作成できるようになっている。指定されたフォーマットに従い、音声はMP3ファイル形式に、画像はjpeg形式にし、タスクなどの情報はexcelに打ち込み、csvファイルにし、アップロードすればよい。

2.2 教材の概要

教材の内容は、学習者が興味を持って聞き取りたいと思う日常にある会話を中学校2年生用の市販のリスニング教材（浜島書店編集部, 2007）から選定した（表1）。それは、前任校にて中学生にどのような英語を聞き取りたいかと調査した結果を参考に

■ 表1：教材の概要

	Skit	Section	長さ (秒)		語数		内容	文法項目など
Chapter 1 Present	1	1	28	15	76	49	タクミとメグのグリーティングカードについての会話	接続詞 when
		2		13		27		
	2	1	26	10	98	39	アンディとエミのCD ショップでの会話	接続詞 that
2		16		59				
3	1	33	20	102	54	ヒロキがジェーンの家でのクリスマスパーティーに参加しての会話	There is / are	
	2		13		48			
Chapter 2 Plan	1	1	23	10	69	32	ALT のスミス先生とシホの会話	be going to
		2		13		37		
	2	1	24	10	79	32	ジェーンとヒロキの会話	to 不定詞 名詞的用法
2		14		47				
3	1	25	13	87	44	ミサトはバイカーさんの家にホームステイ中	will	
	2		12		43			
Chapter 3 Asking for a help	1	1	22	12	85	42	ユウジと隣に引っ越してきたアダムスさんの会話	Is there ...?
		2		10		43		
	2	1	22	13	70	45	メグミが外国人の男性に道を聞かれている	Could you tell me ...?
2		9		25				
3	1	22	9	77	33	ミサキとスミス先生の会話	May I ...? Could you ...?	
	2		13		44			
Chapter 4 Situational Dialogues	1	1	19	11	58	31	ヨウコの入国審査での会話	show 人+物
		2		8		27		
	2	1	18	9	55	25	メグの病院での会話	症状の表現
2		9		30				
3	1	25	12	84	38	ジムの買い物での会話	Shall I ...?	
	2		13		46			

した。長さ（秒）は、録音をし直したものである。

3 コースウェアの詳細と各種情報の例

コースウェアの詳細と各種情報については、前述した図1の「三ラウンド・システム」の構造に従って述べていく。学習者は図2のメニュー画面から学習を開始する。

まず第1ラウンドでは、タスクの前に「事前情報」を提示する。これは学習者に心の準備を与えるものである。例えば、英文内容に関連したイラストや写真である。この情報は第2、第3ラウンドのタスク前にも以前に学習したことを想起させるために使う。ここでのタスクの目標は「大まかな理解」であり、キーワードなどを拾わせる（表2）。「ヒント情報」としては、イラストや写真、大まかに推測できるキーワードを提示する（図3）。そして、内容を推測させながら音声聴いて概要の理解をさせる。参考情報の辞書情報（WORDSとPHRASES）は、必要に応じて語句の文字、音声、意味の確認ができる（図4）。

■表2：第1ラウンドのタスク例

Task 1	対話を聞いて、大切だと思う単語や表現を拾ってみましょう。拾った単語や表現は覚えておくだけで大丈夫です。
Task 2	2人は何について話していますか。大まかでよいので、聞き取れた単語から、大胆に推測してみましょう。 (CD, buy, give, brother, kind など)

次に第2ラウンドでは、タスク目標は「正確・詳細な理解」である。ここでの目標を達成させるためにタスクを2つか3つ提示する。それぞれのタスクに3つの「ヒント情報」を与えるが、全体的な内容の流れを考えさせるものから、タスクがクリアできるように徐々に具体的に焦点を絞って与えていくヒントがある（表3）。図5のような数語ごとのチャンクで処理させながら理解させる穴埋めのタスクもある。それらのタスクを通して、詳細な理解をさせる。「補助情報」は、コミュニケーションの技術や異文化情報で教材内容の理解を促す役割がある。また、文法的な説明を示すこともある。

最後の第3ラウンドでは、目標が「話者の意図・

■表3：第2ラウンドのタスクやヒント情報、補助情報例

Task 1	女の子はナナの新しいCDについて、何とっていますか。
Hint 1	新しく出たCDを話題にするとき、あなただったらどんなことを言うか考えてから聞きましょう。
Hint 2	対話の初めの女の子が言っていることに注意して聞きましょう。
Hint 3	I think ... という表現を使って、「…と思う」と言っています。
Answer	とてもいいと思う。
Script	I think Nana's new CD is very good.
Tips	女の子はナナのCDが気に入ったことを伝えることで、男の子に「ナナのCDについて話したいな」という気持ちを伝えているのでしょう。この表現は、会話の話題を提供するのに便利です。

結論などの理解」である。ここでの目標を達成させるためにタスクを2つほど提示する。中学2年生レベルの英文素材では、直接的に言われていないことを推測させるタスクを作るのは難しい。そのため、話の内容を総合したり、複数の情報を組み合わせる答えたりするタスクを用意する。ここでもそれぞれに3つの「ヒント情報」を与えるのは、第2ラウンドと同様である（表4）。ここでの注意点は、最終の第3ラウンドのタスクは前の第1と第2ラウンドをきちんと学習すると、できるようにすることである。

■表4：第3ラウンドのタスクやヒント情報、補助情報例

Task 2	男の子は親切だと言われたのに否定しています。それはなぜですか。
Hint 1	まず、「親切だ」と言われているのはなぜなのかを聞き取りましょう。
Hint 2	弟がしてくれたことを聞き取り、否定しているのはなぜか考えてみましょう。
Hint 3	have to と in return の意味を Phrases で確認してから、対話の終わり方に注意して聞きましょう。
Answer	(弟にナナの新しいCDを買ってあげるのは)弟が前にナナのCDをくれたお返しをしているだけだから。
Script	Emi: Andy, you're a very kind brother! Andy: I'm not so kind. My brother bought Nana's last CD for me. So I have to give this CD to him in return.
Tips	男の子は、have to という表現を使って「親切だからあげるんじゃないくて、そうしなきゃいけないからあげるんだ」と説明しています。

る。つまり、タスク間が有機的につながるようになってきている。第3ラウンド後に「発展情報」を提示することもある。この情報は、教材中には扱われていないが、似た場面で活用できる英文などの補足的

で応用的な情報であり、図6のように提示する。そして、学習のまとめの一環としてサイレント・シャドーイングをするタスクもある(図7)。

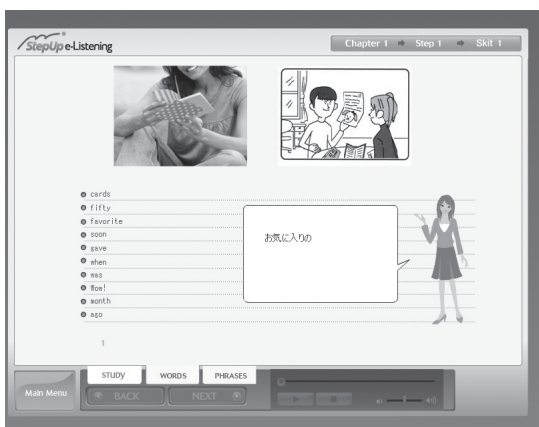
第3ラウンドの学習後には、そのChapterで学



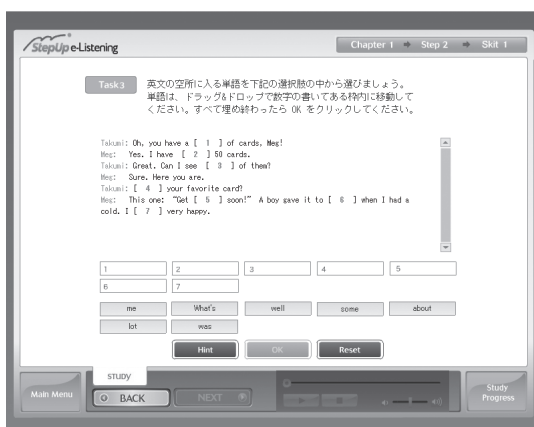
▶ 図 2：メニュー画面



▶ 図 3：学習画面



▶ 図 4：参考情報の辞書情報画面



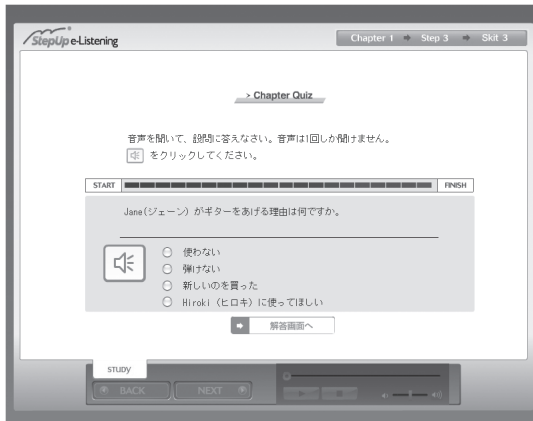
▶ 図 5：穴埋め画面



▶ 図 6：発展情報の画面



▶ 図 7：シャドーイング画面



▶ 図 8 : Chapter Quiz 画面

習したことがどの程度身についたかを確認する Chapter Quiz が設定されている。20問の4択形式であり、きちんと学習をしていればおおよそ達成が可能であろう (図8)。テストの結果は、図9の進捗表画面と同様に各学習者が確認できる。

4 教材の試用

本研究の参加者は、2012年度 (2013年1～3月) に8年生 (中学2年生) に在学した男女合計64名である。

4.1 評価データ

今回開発した CALL 教材を使った指導では教材の評価のために、以下の3種のデータを収集した。

- 1) 学習内容の定着を確認するための小テスト (開発した CALL 教材中の Chapter Quiz) 3回分
- 2) 教材使用後の聴解力の伸びを観察するための Pre-test / Post-test
- 3) 開発した CALL 教材使用後のアンケートによる主観的評価

1) については、この教材中に組み込まれている小テスト (Chapter Quiz) の結果から学習内容の定着度を観察した。

2) については、実用英語技能検定 (以下、英検) 3級の過去問題 (2011年度第2回) のリスニングセクションを使用した。それは、ネイティブスピーカーが友人と話すような発話スピードにすることを



▶ 図 9 : 進捗表画面

依頼して音声素材を録音し直したことで、難易度が4級をはるかに超えているためである。この試用において、Pre-test と Post-test の難易度を統制するために、両者で同じ問題を使用した。

3) については、等間隔尺度法を用いた印象評価と自由記述によるアンケートを実施した。等間隔尺度法を用いた印象評価を採用したのは一般的であり、また「三ラウンド・システム」に基づく教材の学習者に5段階の同尺度法の形式で実施された膨大なアンケートデータとの比較が可能であるからだ。自由記述によるアンケート項目も設けたのは、尺度法に現れない学習者の印象評価を得るためである。

本研究での結果を以下に述べる。

4.2 試用の手順

教材の試用を行った授業の概要は以下のとおりである。週1回の50分授業のうち、20～40分で本教材を試用した。

授業 : 第8学年 (中学2年生) 英語 通常授業 (木曜日または金曜日)

授業担当者 : 岡崎 伸一

学習者 : 品川区立荏原第六中学校第8学年 (中学2年生) 2クラス64名
(不登校生徒の1名と Post-test 未受験者の1名の合計2名は分析から除外している)

使用期間 : 2013年1月17日～2013年3月15日

回数 : 9回

授業時間 : 50分授業

指導場所 : メディアセンター

4.3 結果と考察

4.3.1 学習内容の定着

学習者の総学習時間（授業内外を含む）は、平均2時間53分（range = 1時間27分～7時間17分）であった。8時間程度の学習を想定した教材であったが、授業内での学習時間が確保できずに教材を最後まで学習し終わることができなかった学習者も多くいた（修了できたのは64名中19名）。両クラスともに同じ授業時数であったために学習時間はそう異なることなく、1組は平均2時間57分、2組は平均2時間48分であった。

■表5：教材中のチャプターごとの学習内容理解確認用テスト（Chapter Quiz）（100点満点）

	Ch1	Ch2	Ch3	Ch4
平均(点)	83.42	84.77	87.14	-
Range(点)	50～100	20～100	60～100	-
SD(点)	11.22	17.08	9.76	-
N	60	43	28	-

(注) 当該テスト未受験者は分析から除外。

教材中のチャプターごとの学習理解確認用テスト（Chapter Quiz）の結果（表5）、平均点は80%を超えており、学習修了箇所の内容はよく理解できていたと考えられる。ただし、学習者間で結果に大きな差が見られるところ（Rangeは20～100）もあり、少数ではあるが学習内容が定着していない学習者もいた。この原因としては、公立中学校の学習者のために英語習熟度レベルに差があったことや、まじめに学習に取り組める者と英語自体に苦手意識が強い学習者との間に差があったことなどが考えられる。

なお、Chapter4に関しては最後の学習内容理解確認用テスト（Chapter Quiz）が表示されずに学習者はテストを受けることができなかった。これは原因不明で修正不可能であったため、今回は含んでいない。

4.3.2 聴解力の変化

聴解力の変化は、Pre / Post-testの英検3級リスニングセクション30問中の平均正答数を比較した。その結果、Pre-testで平均17.81問からPost-testでは平均19.67問と、+1.86問正答数が増加した。この結果についてt検定を行ったところ、 $t(63) = 4.21, p < .01$ であり、1%水準でPre-testとPost-testの平均正答数の差は有意であることが判断された（表

6）。そして、伸びがプラスだった学習者は45名、伸びが±0だった学習者3名、伸びがマイナスだった学習者16名であった。ほとんどの学習者は英検を過去に受験していたり、問題集に取り組んでいたりと慣れているため、テストの問題形式に慣れることで得点が上昇することの影響は少ないと考えられる。

■表6：学習前後の英検3級リスニングセクション平均正答数（30問中）

	Pre-test		Post-test	伸び
平均(問)	17.81	→	19.67	+1.86*
Range(点)	7～29		5～30	-10～10
SD(点)	5.95		6.19	3.5

(注) 有意差あり (N = 64, $t(63) = 4.21, p < .01$)。

学習者はこの教材の他に週3時間の英語授業を受講し、その中にリスニング指導も含まれているため、この結果は純粋にこの教材の学習効果と言うことはできない。しかし、中学2年生にとってやや難易度が高い英検3級の問題でプラスの効果が見られた点は評価できると考える。週1回のおよそ2か月という短い期間ではあるのだが、Pre-testとPost-testの結果、伸びが確認されたことは、本研究で開発された教材が、8年生（中学2年生）の生徒たちにとって学習効果をもたらしたことを示していると考えられる。想定された学習時間の確保と自宅からインターネットを介して短時間でも定期的に学習を継続したならば、より良い効果が出たと推測できる。

4.3.3 主観的評価

学習効果があったとしても、学習者が興味や関心をなくしてしまえば英語学習を継続し続けるのは厳しくなってしまう。そこで聴解力の変化だけではなく、学習者の教材への印象評価からも観察した。具体的には、教材の学習終了後に等間隔尺度法（5段階）と自由記述を組み合わせたアンケートを実施した。アンケート回答の際には、教科の成績には関係なく、今後の教材改善のためであることを伝え、記名式で記入させた。

4.3.4 等間隔尺度法（5段階）による評価結果

設問項目は15あったのだが、この報告では学習効果や学習の継続に影響すると考えられる「教材の内容への興味」、「成就感」、「満足感」、「継続学習意欲」を問う5項目に限って観察した。

初めに、5段階評価のうちで4と5を肯定的回答、1と2を否定的回答として今回の試用の平均をまとめた結果を示す(表7)。表中の「肯」は肯定的回答の割合であり、「否」は否定的回答の割合である。

■表7：アンケート項目と主観的評価の否定的、肯定的回答の割合

設問内容	試用(64名)	
	肯	否
1) 内容、トピックに興味を持った	32%	51%
2) Step 1, 2, 3と進むにつれ聞けるようになった	77%	17%
3) 聞き取りの力がついたと思う	61%	22%
4) 学習は楽しかった	56%	30%
5) 違う内容、レベルの別の教材でも学習したい	47%	42%

表7を観察すると、1)の興味・関心以外の項目で肯定的な回答が上回った。2)と3)の成就感に関しての項目は6~7割の学習者が肯定的回答をし、5割半が満足感を得ていた。しかし1)では否定的回答が多く、5)では肯定的と否定的がほぼ同等であった。この結果から、多くの学習者が成就感、満足感を得てはいたのだが、興味を持てなかったことで継続学習意欲もわかなかつたと読み取れる。アンケート内では、「どのような内容やトピックの英語を聞き取れるようになりたいか」への回答には、日常会話や道案内、買い物や病院での会話などと回答している学習者が多かった。本教材では、道案内や買い物や病院での会話は後半部分に収録されている。半分の学習者がChapter3と4を修了できていないことから、興味・関心のあるトピックを学習していない可能性が読み取れる。総学習時間が想定した学習時間ほどできたならば、興味・関心のある学習ができ、継続意欲も増したかもしれないと考えた。

4.3.5 自由記述の回答

等間隔尺度法(5段階)による調査項目の下に自由記述欄を設け、「学習した感想を、なるべく具体的に書いてください」と指示し、ほとんどの学習者が記述した。それらの感想を肯定的、中立、否定的に分けた(表8)。特に、「参考情報」である辞書情報画面の肯定的な感想や、繰り返し聞くことで得られた達成感・成就感を表すものが多く見られた。代表的な回答を以下に挙げる。

■表8：自由記述の肯定・中立・否定の割合(64名)

	肯定	中立	否定
人数	36	12	13
割合	56.25%	18.75%	20.31%

(注)記述なしは3名で4.69%。

肯定的な回答

- ・何回も同じものを聞くことによって、頭にしっかりと入り、その文章の意味がだいぶわかるようになりました。
- ・普通のリスニングに比べてStep Up e-Listeningの方が楽しくできました。ヒントがたくさんあったのであまり難しくなかったです。
- ・授業でやる教科書だけでなく、正しい発音や会話の仕方が学習できるので、とてもいい教材だと思います。ただ聞いているだけなのに、自然と頭に入っているのが不思議でした。
- ・これを通して、聞き取る力が身についたと思う。家でも続けてみたい。

中立的な回答

- ・ダラダラやらず、まじめに取り組めば効果はあるのかも実感したところはあった。同じことを繰り返していくことには、あまり刺激がなくて集中が続かなかつたけど、力をつけるためには何度も繰り返すことが大切らしいので、しょうがないのかなとも思った。
- ・パソコンを使った学習は楽しかったけれど、同じ作業が多すぎるので飽きてしまう。

否定的な回答

- ・何回も同じ問題を聞いていると飽きてくる。5回くらいで聞くのはいいと思う。
- ・リスニングはだんだん眠くなる。

繰り返し聞くことは、本教材の学習システムの根幹の1つである。肯定的な回答の感想が多いが、否定的な回答での「眠くなる」というものもある。教材レベルが合致していれば、繰り返し聞くことで聞き取りの効果を感じていく。しかし、すぐに聞き取れると飽きてくるのだろう。このような学習者にはもう少しチャレンジできるものが妥当であろう。

4.4 試用のまとめ

本研究で開発した教材を使った試用では、学習者は、1)教材の内容を理解して学習を進め、2)聴

解力の伸びが観察され、3)多くの学習者が成就感・達成感を感じ、学習ができたことがわかった。しかし、自由記述では20%が否定的な回答をしていたことを忘れてはいけない。

5 まとめ

本研究において、ICT (e-Learning) を活用した中学2年生のための聴解力養成用の教材を作成し、試用して評価を行った。評価は、1) 学習内容の定着を確認するための Chapter Quiz, 2) 聴解力の変化を観察するための Pre / Post-test, 3) アンケートによる主観的評価を行った。その結果は前述のとおりであり、学習効果は見られたが解決すべき課題も発見された。

今後の課題としては、2つある。1つ目は、学習者の習熟度レベル別に聴解力の変化を観察することである。そして、本教材を使う適切な学習者の習熟度レベルを割り出すことである。これらは今後も継続してデータ分析をしていきたい。

2つ目は、十分な学習時間を確保させることでの変化を見ることである。授業数の確保以外では、否定的な回答の割合が多かったことへの改善の手立てとして、アンケート内では日常会話や道案内、買い物や病院での会話のような内容やトピックの英語を聞き取れるようになりたい、と回答している学習者が多かった。本教材では、道案内や買い物や病院での会話は後半に収録されている。それらの部分を

参考文献 (*は引用文献)

- * 浜島書店編集部.(2007).『聞きトレ64(中2)』. 名古屋: 浜島書店.
- * 文部科学省.(2011).『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策 ~英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて~』
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/fieldfile/2011/07/13/1308401_1.pdfより(2012年4月1日閲覧)
- 旺文社(編).(2012).『2012-2013年対応 短期完成英検3級3回過去問集』. 東京: 旺文社.
- * 高橋一幸.(2003).『授業づくりと改善の視点』. 東京:

Chapter 1 や 2 の前半に設定し、興味・関心のあるトピックを先に学習させる試みが可能であろう。そうすることで、興味・関心と学習の継続意欲を保たせることができるかもしれない。

本研究は、中学生のための聴解力養成教材の開発と試用であった。中学生の興味・関心のあるトピックに対応した教材を開発するには、まだまだ教材の数が不足している。本研究の結果を今後の糧とし、明らかになった課題の解決をめざしつつも中学生の聴解力を養成し、将来はグローバルな社会で勝負し、世界に羽ばたく人材育成をしていきたい。

謝辞

本研究の機会を与えてくださいました公益財団法人日本英語検定協会の皆様、選考委員の先生方に厚く御礼申し上げます。特に、助言担当でありました長勝彦先生には丁寧かつ貴重なご助言を賜りましたことを深く感謝申し上げます。また、本研究の教材のプラットフォームとして使用した Step Up e-Listening は、科学研究費補助金 基盤研究 (A) (1) 「国立大学外国語サイバー・ユニバーシティ用コンテンツ開発研究」(課題番号16200047 研究代表者伊藤直哉)の英語リスニング班(研究分担者 竹蓋幸生、竹蓋順子)の研究で制作されたものであり、使用の許可をいただきましたことを感謝申し上げます。竹蓋幸生先生におきましては、長年ご指導していただきましたことも感謝申し上げます。そして、本研究にご協力いただきました多くの方々に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

教育出版, 104.

- * 竹蓋順子.(2009).『英語リスニング Web 教材作成支援システムの開発とその試用』.『英語教育の新しい理論と実践』. 言語文化共同研究プロジェクト2008. 大阪大学大学院言語文化研究科, 11-20.
- 竹蓋幸生.(1997).『英語教育の科学』. 東京: アルク.
- * 竹蓋幸生・水光雅則.(2005).『これからの大学英语教育』. 東京: 岩波書店, 70.
- * 牛江ゆき子・阿佐宏一郎・与那覇信恵・岡崎伸一.(2010).『英語入門レベル聴解力養成 e-Learning 教材の開発(中間報告)』.『文京学院大学総合研究所紀要』11号, 3-16.